ボランティアの動機と文化的要素
―スペインにおける予備的考察―

塚 本 剛 志 *

Motives for Voluntary Activities and Cultural Background:
Spanish Volunteers as a Case

TSUKAMOTO Goshi

Abstract

Motives for volunteers have been investigated only from the universal perspectives until recently. This essay argues that the different characters among volunteers' motives in different countries can be explained by their cultural backgrounds, taking Spanish volunteers as a case.

According to my questionnaire surveys and key informant interviews, Spanish volunteers have a tendency to do voluntary work without thinking that they are doing it, but they just think that they help mutually and enjoy the activities. And they consider that a good relationship among volunteers is quite important for continuing their activities. This inclination toward voluntary activities in Spain, which is rather different from American or Japanese volunteers, can be explained by some social concepts that anthropologists presented as a typical Spanish sense of value. For example, "amiguisumo" means that a friendship is the most important human relationship and the equalitarianism dominates in its society.

1．はじめに

NGO・NPO の活動が盛んとなる中で，ボランティアに対するマネジメントの重要性が指摘されている．これを受けて心理学や行動科学の分野では，人間の欲求システム研究の蓄積を応用して，ボランティア行為者特有の欲求の在り方を探る研究が進み，マネジメント実践者が，これに従った動機付けをする試みがなされている．ただし，これまで心理学が行ってきた欲求システムの研究は，多くは実験室内での知的行動を扱ったものであり，かつ人間の普遍性の側面に焦点をあてているため，深く広範な実証研究は今後の課題となっている（碓井 1992: 85）．この実証研究については現在のところ 2 つのアプローチが提唱されている．一つは長期的視点の採用である．Pilivian & Charng（1990: 27－65）は，今後の援助研究の課題として，長期的・非衝動的な援助，親しいものの間の援助，制度上の援助などに関する研究など，一過性ではない事例を分析することの必要性を指摘している．いま一つのアプローチは，個々の事例の文脈を重視するものであり，特に個々のボランティア行為者のバック・グラウンドを考慮することに重点をおくものである．この第 2 のアプローチに立って鈴木（1989: 59–63），渥美

* 在エルサルバドル日本国大使館二等書記官

(2000)，安立（1998: 135-156）等は，比較の視点を用いて，国民性の違いによるボランティア観の違いやボランティア行為者の動機の違いの存在を示しているが，違いを表す際に社会学等のユニバーサルな概念を利用するにとどまっている．本稿は彼らの手法を一歩進めようとする問題提起的事例研究である．すなわち今後の本格的比較作業を念頭におき，日本とほぼ同じ 1990 年代初めころにボランティア活動が盛んとなったが，これまで日本と比較されることの少なかったスペインの都市部を事例として考察し，さらに動機の在り方の違いを，従来使用されてきた社会科学の普遍的概念のほかに，固有な文化的要因を取り入れて説明することが有効なことを示唆する．なお本稿における「ボランティア」の定義は田尾（1997)[1] の定義に依拠するが，調査対象者のスペイン人がイメージする「ボランティア」についてはこの限りではない．

以下，2. では，スペイン人に見られる動機の傾向性について，キー・インフォーマント・インタビュー調査の結果を示し，3. では，日本で使用されているボランティア動機に関する測定尺度を使用したアンケート調査の結果を示す．4. のディスカッションでは，第 1 に 2. および 3. の動機傾向調査結果の共通の動機の特徴として，1) 助け合いによって人や社会の役に立つこと，および 2)ボランティア対象者・協労者を中心とした関係者との良好な人間関係を楽しむことを挙げ，さらに被調査者が自分はボランティアをしていると思わない意識を持つことを示す．第 2 にこの傾向が日本の動機調査結果と異なる部分があることを指摘し，第 3 にスペイン都市部に特徴的な動機の傾向性を理解するために社会文化的要因を加味するならばよりよい理解に至る可能性を提起する．

2．キー・インフォーマント・インタビュー調査

2.1 聞き取り調査の概要と結果

ボランティア行為者の動機の在り方を探るために，スペインにおけるボランティアの中で大きなパーセンテージを占める学生・青年および中年女性の 3 人のスペイン人に対してキー・インフォーマント・インタビューを行った．

① A（男，25 才．以下，年齢は全て 2002 年 10 月の時点）は，在学する大学内の「ユネスコフォーラム」という組織で約 4 年間，芸術分野の国際交流を内容とするボランティア活動歴をもつ．バレンシア市在住．聞き取りは 2002 年 9 月から 2003 年 10 月まで合計 22 回行った． ② E（男，30 才）は，大学において留学生との国際交流を促進するボランティア・グループを創設し，約 3 年間活動した．聞き取り当時スペイン東部ムルシア市在住．聞き取りは 2002 年 10 月～ 2003 年 6 月の間に 9 回程行われた．③ M（女，42 才）は，主婦であり老人福祉施設「介護センター」で，公文書の添削や作文添削ボランティアとして 4 年間の活動歴がある．スペイン中部グアダハラ市在住．聞き取りは 2003 年 11 月～ 2004 年 4 月まで合計 6 回行われた．各聞き取りの 1 回の時間は 1 ～ 3 時間である．A と E については，彼らのボランティア仲間からも若干の聞き取りを行った．本章では，彼らが語ったボランティア開始，継続，停止の理由のみを抜き出して示す．

2.1.1 ボランティア活動開始の理由

具体的な開始理由は 3 者 3 様である．A は，ゆくゆく職業としたい芸術をテーマに色々な

活動をしている団体に興味をもち，今後につながる人間関係を得ようとの程度の軽い気持ちであり，また人がやってないこと，友達をあっと言わせるようなことをしたい，という欲求は常に持っていた．Eは，留学生として生活や国際交流の楽しさを経験し，今度は外国からスペインに来る留学生にお返しをしたい，また留学生との関係は将来に役立つと考え，意気投合した2人とNPOを創設した．Mは，家族ぐるみで親しくし，かつ相談事もしていた友人の頼みで，足繁く通っていた「介護センター」でボランティアを始めた．もちつもたれつであるという思いと，自分の暇な時間を有効に使えるという思いがあった．3者に共通する要素として関係者との良好な人間関係，および自らのためにツテを求めることをも含めた助け合いが大きな要因となっていることが見て取れる．

2.1.2　参加直後の活動への印象

Aにとって，初めての活動である外国人青年の観光のサポートは，「ボランティアをするというよりも，みんなと一緒に楽しんでいた，という感じだった」．また団体の代表であった教授について「色々な話をしてみると，その人間性がとても好きになると同時に，立派な人だなあ，と感心した．尊敬（respeto）という感覚だと思う．」と述べる．Eの場合は，「始まった当初は，団体を設立したというよりも，3人で交換留学生と友達になって…スペイン人学生，ムルシア地域住民を巻き込んで，楽しいことをしよう，という単純な思いしかなかった」．さらにMは，「自分の役割を与えられたことがとても嬉しかったようにも思う．…『介護センター』の仲間に入っている，というか，彼らと対等の関係を保っている，というような気持ち」と言う．AとEはボランティア対象者・協労者など関係者との交流から生まれる楽しさを述べている．Mは仲間意識を持てた喜びを強調しているが，以下に見るように彼女にとって楽しみは前提条件であった．

2.1.3　やりがい，あるいは続けた理由

3者3様の語り方をしている．Aは，代表であった教授との関係の他に，今ひとつの要因として手伝ってくれる者の存在を言う．「僕を手伝ってくれる立場の人もいるわけだから，僕がしっかりやらないと，と自然と力が入るね．」「彼がしっかりやってくれるから，自分もしっかりやらなければ，という気になる」．Mは，役立つことの嬉しさと楽しみを述べる．「自分のしている活動が，『介護センター』の役に立っていると思うと，とても嬉しいし，これからも続けていこうとは思う．自分の暇な時間を使って楽しいことが出来るから」．これに対してEは続けてきた理由についていくつかの側面から語った．「代表，副代表みたいな立場になると，何かをしなければならないような，またそういう立場の役割を果たすことにやりがいを感じるような，自己暗示的な意味合いもあった．新しい団体の副代表として，ムルシアに新しい活動を広めていくんだ，ということに喜びを感じた．」「社会的な意義は感じていたし，そういった活動があまり盛んではなかったムルシアという地域で，新しい，画期的な活動に参加することに名誉を感じていたように思う．」「ボランティアとしてある程度責任のある役割をこなしてきたことが，自信ややりがいにもなり，やる気の源でもあったように思う．ある程度責任がないと，きっと中途半端に投げ出してしまうことも可能だし．」「1年間うまくやってこられた理由としては，3人の相互扶助の雰囲気が

あったからだと思う．…そういった相互の助け合いを通じて信頼関係が生まれていたように思う．…誰かが助けてくれるという安心感があったから」「楽しむために関わっていたのだと思う．…楽しいからやれた，ということだと思う」．やりがいとして楽しさ，ボランティア関係者との信頼関係・責任感，社会に役に立つことなどがあげられている．

2.1.4 実際に活動が苦しく感じられたときに継続した理由

Aは代表であった教授の存在をあげる．「何か戸惑うことがあれば，まず代表の意見を聞いていたし，その都度，教授の人間性に触れることが出来，自分にとっては学ぶべきことが多く，とても尊敬していた．代表の存在のおかげで，安心してユネスコフォーラムに関わってこられたように思う」．Eは2人の仲間の存在をあげる．「投げ出さず，自分が他のコアメンバーの役割を担ってまで活動に継続的に関わっている理由としては，今までは他のコアメンバーが自分を助けてくれていたからここまでやってこられたのだという思いがあり，今度は自分が彼らを助けてあげなければ，という風に思っている．」「良くも悪くもコアメンバーの3人の仲が良すぎたことがここまで続けてこられた原因，また続けなければならないと自分に思わせた一番の原因であるように思う．参加してくれる交換留学生やスペイン人学生，活動を支援してくれる大学や地域の人々のため，というよりはむしろ，ファニーとファン・ディエゴ（仲間2人）のため，といった方が正確かもしれない」．AもEもボランティア仲間や指導者との絆を強調している．なお，Mは継続を苦しく感じた経験がなかった．

2.1.5 活動停止の理由

Aの場合は学業に専念する必要と代表の交代であった．「前代表が辞任するとなると，僕にとってユネスコフォーラムの意義自体が，今までのものとは全く別のものになってしまう気がする」．Eの場合友人2人と同時に活動を停止した．本人は就職，ひとりの友人は学業への専念の必要から活動を停止したが，いま1人の友人は2人が去るため自らも活動を停止した．またEの創設した団体では，途中から加わった3人のメンバーが程なく3人とも脱退するという事態に遭遇したが，E達旧メンバーが推測する脱退理由はやはりこの人間関係であった．「それまでの約1年半の活動を知らない人がアイメウ（団体名）を名乗って新しい活動をすることには正直抵抗があったように思う．」「旧コアメンバーの仲が良すぎた分だけ，無意識的にそのほかの人に対しては排他的な態度をとってしまったのかもしれない」．Mの場合は，仲のよい人々のところへ遊びに行く感覚での「介護センター」訪問を続ける中で，開始時と同様，よき友人の頼みを受け入れて活動を停止し，さらに再開した．学生に見られる学業専念・就職以外では，ここでも周囲の人々なかでもボランティア関係者との人間関係が大きな要因となっている．

2.1.6 ボランティア観

Aは，「世間の人が言うような『ボランティア活動』をしている意識などはまるでなく，タダで外国に行けるし，世界に友人ができるし，自分の興味のある芸術に関わることも出来た」と述べる．Mは「ボランティア活動を積極的，主体的にしている，というよりは，仲の良い友人たちと一緒に時間を過ごしている中で，たまたま私の知識が彼らの仕事の役

に立つから，ちょっとお手伝いしている，といった感覚」「仲の良い人々のところへ遊びに行っている感覚」と述べる．3人ともボランティア活動をしている意識が希薄であることを述べている．

2.2 まとめ

前節で示してきたインフォーマントの決断の理由には，楽しさとともに，その楽しさをもたらすボランティア対象者・協労者を中心とする関係者との人間関係の要素が，いずれの場面でも色濃くあらわれている．また助け合い，すなわち社会生活のために自らツテを求めること，および助けてくれた者への広い意味での恩返しが当然であるという考えも動機の一つであるが，この考えに由来するのであろう，自らの活動をボランティアをしているとは思わないと意識されている．ただし上述の3名は，いずれもメンバーの少ないボランティア・グループか個人でボランティアを行っていた者達なので，良好で濃密な人間関係が重要な要因となりやすかった可能性がある．

次章では，30人以上のボランティアを擁する3団体に対して行った動機の傾向の数量的調査の結果を示す．

3．ボランティアへのアンケート調査

3.1 アンケート調査概要

本章でアンケート調査の回答者となったボランティア行為者は，スペイン人がマドリードとその近郊で運営する3つのボランティア団体に所属するスペイン人であった．アンケート調査票として，これまで日本人ボランティア行為者を対象とした実証研究で使用されてきた「ボランティア活動動機測定尺度（18項目）」（表1参照）を使用し，回答欄は，

表1　ボランティア活動動機測定尺度18項目

1. 喜んだり楽しんだり出来る．
2. 自分の持っている知識，技術を使う練習になる．
3. 余暇が有効に使える．
4. 自己を再発見し，成長させることが出来る．
5. 何らかの報酬や返礼が期待できる．
6. 毎日の生活に充実感が持てる．
7. 自分の生活や将来にボランティア活動を通じての経験が活かせる．
8. 自分の知識，経験，技術を活かすことが出来る．
9. 人はお互いに助け合わねばならず，自分にもその義務がある．
10. 対象者の苦しみが和らぐ．
11. 人に喜んでもらえる．
12. 対象者が積極的に社会参加できる．
13. 社会の一員として当然のことだ．
14. 人や社会の役に立てる．
15. 対象者が喜びを感じることが出来る．
16. 友人を得ることができる．
17. 他のボランティアと楽しく活動できる．
18. 活動を通じて積極的に社会参加できる．

（出所：妹尾・高木 2003: 118）

「全くあてはまらない」,「あまりあてはまらない」,「どちらともいえない」,「あてはまる」,「非常にあてはまる」の5項目とした．アンケートの実施方法は対面で聞き取りによって行い，余談および付随的な5つの質問（そのうち2つを3.で使用）を交えた．また集計の際には上記5つの回答に対し，それぞれ「全く当てはまらない」1ポイントから,「非常にあてはまる」5ポイントまで点数化し平均値を出した．

3.2 「マドリード国際協力サークル」に対する調査結果

「マドリード国際協力サークル」（CCIM, Círclo de la Cooperación Internacional de Madrid（仮名），以下シームと呼ぶ）は，首都マドリードを中心に活動を展開するボランティア団体で，筆者がアンケート調査を開始した2004年1月の時点で専従職員6人，ボランティア登録者122人から構成され，設立7年目となる団体であった．シームの主な活動は，1）年に2回フェアトレードによって発展途上国から輸入した伝統工芸品の販売イベントを実施すること，2）ボランティア会員から募った寄付金によって途上国の子供たちの学費援助プログラムを実行すること，3）途上国のNGOと協力しつつボランティア会員の希望に応じて，里親や養子の取り決めなどを交渉・実施すること，である．

各ボランティア行為者の活動への取り組みは非常に多様であるが，筆者がアンケート調査を実施することが出来たのは，フェアトレード販売イベントの準備に定期的に携わっていたボランティア行為者，途上国の子供たちに責任を持って学費支援をしているボランティア行為者，シームによるプログラムによって途上国から養子を受け入れているボランティア行為者，そして地域で勧誘活動を行っているボランティア行為者など合計64名であった．彼らはシームの専従職員と「顔見知り」になる程度にシームに関わっているボランティア会員であり，彼らのうちの大半は，シームの事務所にもしばしば顔を出し，シームの専従職員とは，シームの活動を離れても仲の良い友人関係を保っていた．

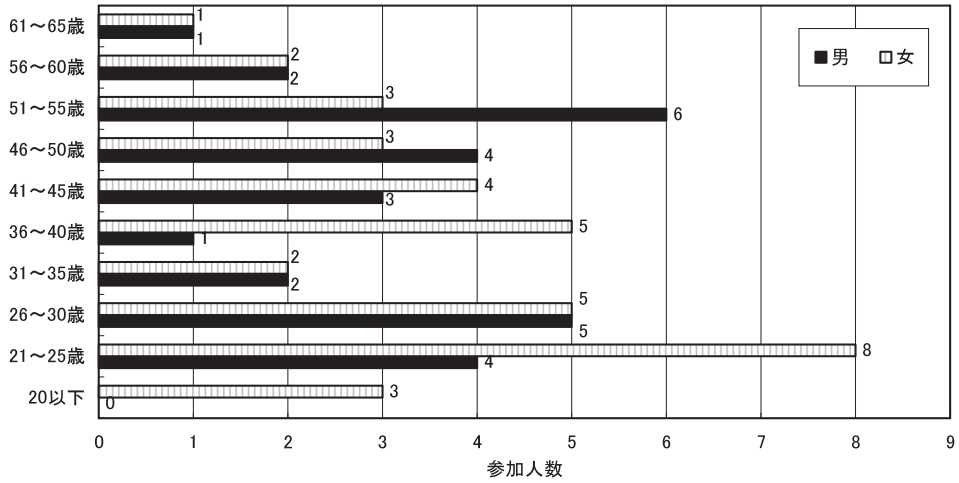
アンケート回答者の年齢は，20代前半と50代前半の人が比較的多いが，その他の年齢層の人も見られる．また性別は女性36名，男性28名で若干女性の数が上回っているが，大差はない（図1参照）．職業は，時間的に余裕のある大学生（28%）や主婦（25%），また金銭的に余裕のあると思われる中高年層の社会人（会社員，公務員，自営業を合わせて41%）が占める割合が比較的多かった（図2参照）．

表2は，各アンケート回答者がそれぞれの質問に対して出した回答を一覧にしたものである．表2からわかるボランティア行為者の一般的な動機の傾向は次のようである．高い数値を示したものとして,「人に喜んでもらえる（4.88）」,「活動を通じて積極的に社会参加できる（4.78）」,「人や社会の役に立てる（4.61）」,「毎日の生活に充実感が持てる（4.56）」であった．また低い数値を示したものとして「何らかの報酬や返礼が期待できる（1.80）」,「自分の知識，経験，技術を生かすことができる（2.27）」,「自分の持っている技術，知識を使う練習になる（2.38）」があげられた．

3.3 「環境保全運動」に対する調査結果

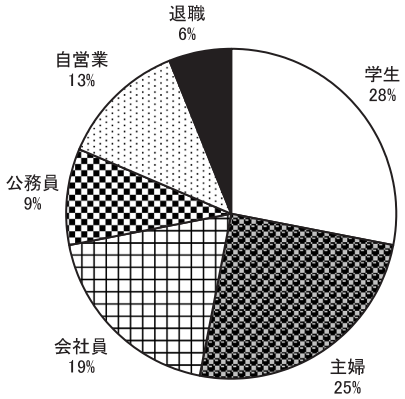
「環境保護運動」（El Movimiento para la Pro-

図1　シームに係わるボランティア行為者の年齢と人数



（出所：筆者作成）

図2　シームに係わるボランティア行為者の職業



（出所：筆者作成）

tección Medioambiental（仮名））という名称は，スペイン各地で環境保全に携わるいくつかの住民組織の連合体，ネットワークの総称である[2]．筆者が調査を行ったのはそのうちの一つであり，カスティーリャ・イ・レオン自治州（La autonomía de la Castilla y León）の田舎町ハランディージャ・デ・ラ・ベラ（Jarandilla de la Vera，以下ハランディージャ）を中心に活動を行っているボランティア団体である．「環境保護運動」のボランティア行為者は全てハランディージャ，もしくはその周辺の村の住民である．「環境保護運動」は，これまで約4年にわたり環境保護活動を続けてきたが，もともとは村の自治組織が母体となっている．ハランディージャはマドリードから公共交通機関で2時間半から3時間の距離にあり，かつ一年を通じてスペイン国内外から多くの観光客が押し寄せる村である．多くの村民はそのような観光客をターゲットとしたレストラン，土産物屋を経営する自営業

表 2　シームに関わるボランティア行為者の動機の在り様に対する回答

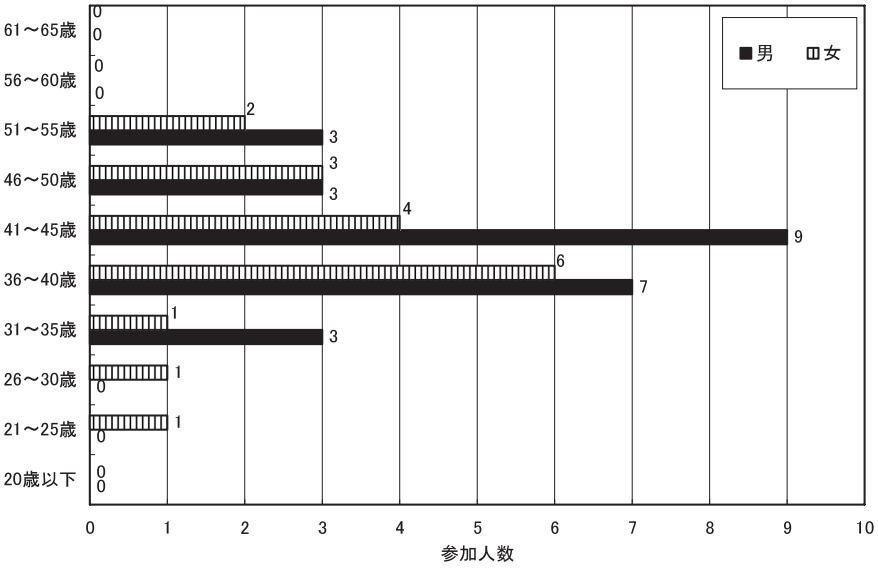
項目番号	全くあてはまらない 1 ポイント	あまりあてはまらない 2 ポイント	どちらともいえない 3 ポイント	あてはまる 4 ポイント	非常にあてはまる 5 ポイント	平均値
1	0	0	6	30	28	4.34
2	10	26	25	0	3	2.38
3	0	1	7	28	28	4.45
4	0	2	6	16	40	4.47
5	19	39	6	0	0	1.8
6	0	0	1	27	36	4.56
7	4	15	23	17	5	3.06
8	14	24	22	3	1	2.27
9	0	0	3	34	27	4.38
10	17	9	3	12	23	3.23
11	0	0	0	8	56	4.88
12	0	0	4	47	13	4.14
13	0	1	0	46	17	4.23
14	0	0	0	25	39	4.61
15	1	7	3	28	25	4.01
16	5	5	10	32	12	3.64
17	0	2	10	32	20	3.84
18	0	0	1	12	51	4.78

（出所：筆者作成）

者であり，生計を立てていくためには引き続いて一定程度の観光客を受け入れていく必要がある．近年，観光客の来訪により村の美化・環境が悪化するようになったため，従来の自治組織が村の環境保護・美化を中心に活動する「環境保護運動」を発足させ，さらに 1999 年 11 月に，他の地域が行なっている環境保護運動についての情報やノウハウを入手するために「スペイン環境保護運動」のネットワークに加盟した．

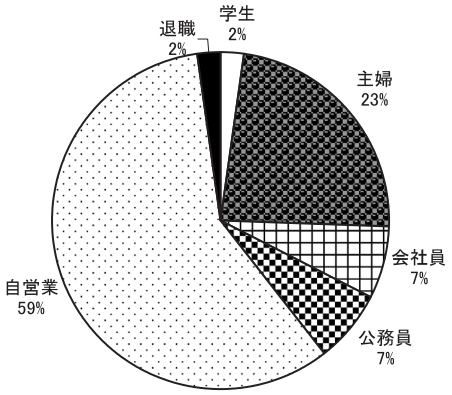
現在,「環境保護運動」に関わるボランティア行為者は 43 名であり，その属性は以下の通りである（図 3，4 参照）．性別については男性 25 名，女性 18 名であり，年齢層は学生などの若年層が少なく，中高年層が多い．ボランティア行為者の職業は，自営業（59%），もしくはその配偶者と思われる主婦（23%）が多い．村の環境悪化の被害を最も直接的に受け,「環境保護運動」の活動の成果如何に生活が左右されるのは，日々観光客を相手に生計を立てているレストラン，バー，土産物屋などを経営する自営業者達であるため，そう

図 3 「環境保護運動」に係わるボランティア行為者の年齢と人数



（出所：筆者作成）

図 4 「環境保護運動」に係わるボランティア行為者の職業



（出所：筆者作成）

いった人々は「環境保護運動」の活動を通じて積極的に村の環境保護に関わろうとする動機を持っているものと考えられる．

表 3 に見られるボランティア行為者の動機の傾向は，次のようである．高い数値を示したものとして，「人や社会の役に立てる（4.91）」，「人に喜んでもらえる（4.79）」，「社会の一員として当然のことだ（4.63）」，「対象者の苦しみが和らぐ（4.60）」，「人はお互いに助け合わねばならず自分にもその義務がある（4.58）」であった．また低い数値を示したものとして「自分の持っている技術，知識を使う練習になる（2.67）」，「自分の知識，経験，技術を生かすことができる（2.72）」，「喜んだり楽しんだりできる（2.93）」があげられた．

このほかにも「何らかの報酬や返礼が期待

表 3 「環境保護運動」に関わるボランティア行為者の動機の在り様に対する回答

項目番号	全くあてはまらない 1 ポイント	あまりあてはまらない 2 ポイント	どちらともいえない 3 ポイント	あてはまる 4 ポイント	非常にあてはまる 5 ポイント	平均値
1	0	10	28	3	2	2.93
2	8	12	14	4	5	2.67
3	5	3	7	18	10	3.58
4	0	2	20	18	3	3.51
5	0	0	3	23	17	4.33
6	0	0	12	21	10	3.95
7	2	1	10	17	13	3.88
8	8	12	10	5	7	2.72
9	0	0	0	18	25	4.58
10	0	3	3	2	35	4.6
11	0	0	0	9	34	4.79
12	0	4	16	15	8	3.63
13	0	0	0	16	27	4.63
14	0	0	0	4	39	4.91
15	4	5	16	14	4	3.21
16	4	3	19	10	7	3.3
17	0	5	6	25	7	3.79
18	0	5	3	16	19	4.14

（出所：筆者作成）

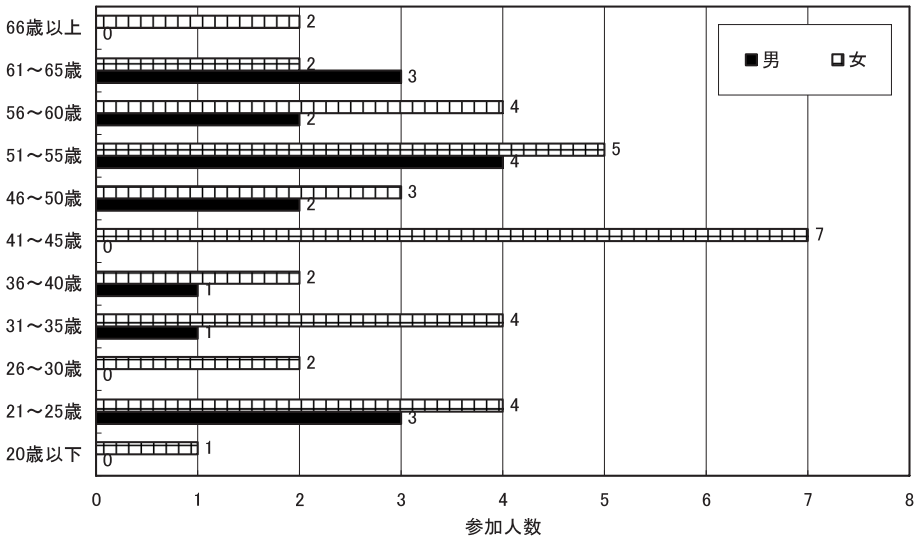
できる（4.33）」，「自分の生活や将来にボランティア活動を通じての経験が活かせる（3.88）」などの項目における得点が相対的に高いが，これらの傾向の一部は，「環境保護運動」が実践する活動が，各ボランティア行為者が生活をしていく上で必要に迫られて参加せざるを得ないという性質のものであることに起因していると思われる．

3.4 「高齢者福祉ボランティア」に対する調査結果

「高齢者福祉ボランティア（Voluntarios para la Tercera Edad）（仮名）」は，アルコルコン市（Alcorcón）を中心に活動する組織で，所属するボランティア行為者数は筆者がアンケート調査を行った2004年5月の時点で，42名，有給で働くスタッフは2名であった[3]．アルコルコン市はマドリード市の南西に位置する新興住宅街であり，マドリード中心部からバス・列車などの公共交通機関で30分から40分と，通勤・通学に大変便が良いことから，ベッドタウンとなっている．

本団体は，10数年前よりアルコルコン市にあった民間老人ホーム「Residencia de los

図5 「高齢者福祉ボランティア」に係わるボランティア行為者の年齢と人数



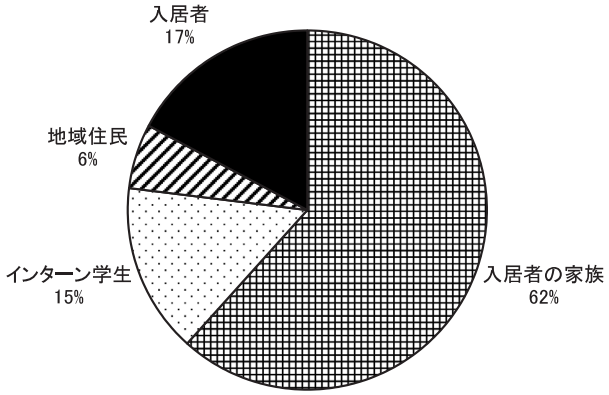
（出所：筆者作成）

Ancianos（仮名）」に居住する老人の家族が中心となったボランティア・グループである．2001年あたりから，老人ホームが彼らに資金援助・場所提供をする代わりに彼らが責任を持って種々のイベントを開催する，という事実関係が出来上がった．そして翌2002年春に老人ホームとは分離した新たな福祉ボランティア団体として「高齢者福祉ボランティア」が発足し，老人ホームで働く職員が「高齢者福祉ボランティア」の兼任スタッフとなった．

図5に見るように，ボランティア行為者は40代・50代の中年世代が最も多いが，20代前半から60歳以上の高齢者まで幅広い．25歳までのボランティア行為者8人のうち6人は，大学で社会福祉・医療を学ぶ学生であり，そのうち4人はインターンとして半年間，もしくは1年間老人ホームに勤める人々である．26歳以上から60歳までのボランティア行為者の大半は老人ホームに入居する老人の家族であり，彼らの職業を見ると主婦が多い（37名中24名）．61歳以上のボランティア行為者7人のうち3人は老人ホームの近くに住む地域住民，より正確に言えば，老人ホームに入居している老人の友人達で，よく老人ホームに遊びに来ている人々である．また，61歳以上のボランティア行為者7名のうち残りの4名は，彼ら自身が老人ホームに入居している老人であり，「高齢者福祉ボランティア」に参加するボランティア行為者であると同時に右団体が提供するサービスの受益者でもある（図6参照）．

表4のアンケート調査の結果から，ボランティア行為者の動機の傾向として次のことが言える．高い数値を示したものとして，「対象者が積極的に社会参加できる（4.86）」，「人や社会の役に立てる（4.83）」，「多のボランティアと楽しく活動出来る（4.81）」，「活動を通じて積極的に社会参加できる（4.61）」，「人に喜んでもらえる（4.55）」，「対象者の苦しみが和らぐ（4.50）」であった．また低い数値を

図 6 「高齢者福祉ボランティア」に係わるボランティア行為者と老人ホームの関係



（出所：筆者作成）

表 4 「高齢者福祉ボランティア」に関わるボランティア行為者の動機の在り様に対する回答

項目番号	全くあてはまらない 1 ポイント	あまりあてはまらない 2 ポイント	どちらともいえない 3 ポイント	あてはまる 4 ポイント	非常にあてはまる 5 ポイント	平均値
1	1	10	12	18	1	3.19
2	5	9	20	3	5	2.86
3	7	10	12	11	2	2.79
4	0	8	29	5	0	2.93
5	39	3	0	0	0	1.07
6	0	1	12	19	10	3.9
7	0	2	6	18	16	4.14
8	5	9	20	2	6	2.69
9	0	0	4	20	18	4.33
10	0	0	2	17	23	4.5
11	0	0	0	19	23	4.55
12	0	0	0	6	36	4.86
13	0	0	2	20	20	4.43
14	0	0	0	7	35	4.83
15	0	0	1	20	21	4.48
16	0	0	3	29	10	4.17
17	0	0	0	8	34	4.81
18	0	0	4	8	30	4.61

（出所：筆者作成）

示したものとして「何らかの報酬や返礼が規定できる」,「自分の知識，経験，技術を生かすことができる（2.69）」,「余暇を有効に使える（2.79）」,「自分の持っている技術，知識を使う練習になる（2.86）」があげられた．

3.5 まとめ

以上，性格の異なる3ボランティア団体に所属するボランティアに対するアンケート調査結果から，動機に関する共通性を探ると次のようである．極めて高い動機として，「人や社会の役に立てる」,「人に喜んでもらえる」，さらに充分に高い動機として「社会の一員として当然のことだ」,「人はお互いに助け合わねばならず自分にもその義務がある」があげられる．また低い動機として，「自分の知識，経験，技術を生かすことができる」,「自分の持っている技術，知識を使う練習になる」があげられる．なお「友人を得ることが出来る」「他のボランティアと楽しく活動できる」は「環境保全運動」を除いて充分高い動機と言えるが，「環境保全運動」は当該コミュニティの経済活動に資する活動であったため，これらの動機が低くなったと考えられる．

加えて2．の調査結果を鑑みてアンケート調査時に試みた2つの付随的質問項目への回答から次のような結果を得た．「『運命共同体』にある他のボランティア行為者のために働きたい」という質問項目に対しては，前掲3団体に所属する回答者の平均値が初出順にそれぞれ4.09，4.40，3.71という高い点を得た．「ボランティア活動をしているとは思っていない」には4.14，4.79，4.93（同上）という極めて高い支持が得られた．また「（カトリックの教えでは）人を助けるのは当たり前．自分が困ったときにまた誰かが助けてくれる」（33才女：シームでのアンケート回答者の余談）など，助け合いについてはアンケート調査中にもよく聞かれた．

4．ディスカッション

以上，2.および3.で得られた調査結果には，次の様な共通の特徴が認められる．主な動機として1）助け合いによって人や社会の役に立つこと，および2）ボランティア対象者・協労者を中心とした関係者との良好な人間関係を楽しむこと，があげられる．くわえて自分がボランティアをしていると思わない傾向が大変強い．この意識は活動を楽しんでいることと助け合いが当然であることから生まれると考えられる．

この共通の特徴にかかわる今後の調査に資するために，2つの議論をしておきたい．

第1は，上述の共通の特徴は日本人ボランティアの動機とは傾向が異なることである．日本について，生涯学習審議会答申(1992)は，ボランティア活動は，未だ奉仕，献身のような「与える」というイメージが付着している一方で，近年では，自己実現，自己開発のような「学び，獲得する」イメージの活動として位置づけられるようになってきた，と述べる．このことは，桜井（2002: 111–122）の京都市域における参加動機構造調査において第1の動機が「自己成長と技術習得・発揮」，そして第2の「レクリエーション」および第3の「利他心」が僅差で並ぶこと，さらに医療福祉ボランティアの動機の日米比較に関するアンケート調査（安立1998: 135–156）において，日本人の複数回答で高い順位を占めた動機が「人生を豊かにする」,「勉強になる」,「社

会貢献」，そして「人を助ける喜び」の順となり，また最も重要な参加動機の回答は「人生を豊かにする（25%）」が2位の「社会貢献（10%）」他を引き離す結果などからも伺われる．日本では動機の傾向として第1に自己実現・自己開発があり，社会貢献がこれに次ぐと言えよう．また各調査からはボランティア協労者同士の人間関係を重視する傾向は読みとれなかった．

第2に，日本の傾向と比べた場合のスペイン都市部における，助け合いと関係者間の人間関係が主な動機となる傾向，さらには自らの活動をボランティアと見なさない意識は，その社会生活に根ざす価値観を加味すると，よりよく理解できる可能性が大である．

ボランティア関係者間の人間関係を大切にする傾向や，ボランティア行為をボランティア活動と見なさない傾向について，Mは次のような背景説明をする．「（フィンランドでの1年間の体験から思うこととしては）スペイン人は一般的に，家族ぐるみで付き合う人間関係をとても大切にする傾向があるように思う．田舎町では，そういった人間関係をすごく大切にしているように思う．誰かとは仲が良いから，とか，誰かとは仲が悪いから，といった風に相手によってその関係を変えたりすることはなく，自分の周りにいる人に対しては常に平等に接し，仲が良いのがごく当たり前で，仲が悪い，ということはあり得ない，といった雰囲気があるように思う．」「スペイン人は仲の良い友人に頼まれれば何でもします」．さらにこの人間関係が大切な社会のあり方は，Aが語る自身の動機の説明からも見えてくる．「最近のスペインの若者の大学進学率は7割くらいなので，みんな大学卒業後は仕事が見つかるまではフラフラしている．大抵は，最終的には親や親類のツテを頼ってどこかに仕事を決めるけど，…休学を利用して，その間にアルバイトやインターンをして予めコネクションを作ったり，職歴を得るなどしてから大学卒業をする人も多い．」「学生でいる間に卒業後に雇ってくれそうな職場を見つけないと，と思っていた．そのためには友人，知人とのつながりが大切だから，大学入学当初にできることといえば，とりあえずそういった人間関係を広めることしかないと考えていた」．

そしてこれらインフォーマントの人間関係に関わる説明は，その背景として次のようなスペインに関する価値観の研究成果を援用するならば，よりよい理解に至れると考えられる．

戸門（1999: 359–362）は，スペインにおいて政治システムやビジネス慣行がいかに普遍的になろうとも，数百年にわたって継承されてきた文化パターン，伝統的価値観は簡単には変化することはなく，密度の濃い人間関係や家族関係，人生を謳歌し名誉を重んじる国民性などの「スペインらしさ」は健在であることを指摘している．またスペイン人の平等主義に関する研究の代表例にはアリエール（1977）などがあるが，それらの平等主義に関する研究を受けて，野々山（1998: 19–43）は，現代スペイン社会の友人間における平等主義について以下のように述べている．20世紀後半以降の，変容を遂げたスペイン社会にも，伝統的な友人間の平等主義，すなわち友人至上主義（amiguismo）が残っている．スペインにおける友人の友情性，平等性は無視できず，社会の中心をなすといっても過言ではない．特に20世紀中葉から後半にかけてフランコ体制から民主主義社会に変革を遂げた時

代の人間関係は友人至上主義そのものであり，例えば，就職，電話の設置，役所の手続きなど，すべてが有力者の友人を持つことで解決でき，それは他国の研究者には「新しい物乞いの形態」とも呼ばれた．スペイン人は一般に，平等主義・友人至上主義を互いに通用させる数人からなるグループ（クアドリリャ，cuadrilla）を構成し，そのグループ内では共通の友情，忠誠心によって結ばれている．そのクアドリリャに所属さえしていれば，様々な機会，情報が平等に与えられる．多くのスペイン人は幼少時代，青春時代，結婚後と，人生の節目によってそのグループを変えて一生を送る．バレンシアでは，青年はクアドリリャ内の人間関係，コネによって社会生活をはじめるのが習慣となっており，地元の祭事への参加，就職先の斡旋など，そのグループに所属していれさえいれば手厚い友情，平等主義によって援助が期待できる．アラゴンではクアドリリャに属し社会生活を送ることは，ほとんど義務付けられている．また平等主義・友人至上主義は，21 世紀には廃れてしまうどころか，今よりもますます重要になるだろうと社会学者の Armando（1996）は予想している．

以上，スペインではボランティアの動機がスペインの生活上の価値観に深く関係している可能性は高く，今後，平等主義・友人至上主義などの概念の検討とともに，本格的な調査をする必要があろう．

なおスペインという単位について述べれば，もとより地方色豊かで，かつ社会変化の激しい現在のスペインについて国単位でその特徴を叙述することには，常に異論があろう．しかしボランティア動機研究が現在国単位で進展していること，スペイン文化研究もスペインをひとまとまりと見る研究があること，さらに都市生活者ボランティアのマネジメントについては政策科学上 1 国で語ることが有効であると判断されることから，当面の研究はスペイン 1 国を扱うことに意義があると考える．

しかしいずれにせよ動機における社会文化的要因の重要性は，いずれの国の研究，国同士の比較研究においても同様に言えることであろう．

註

1）「ボランティア」とは他人に対して自らの利害を捨てて，自らの意思で，しかもその行為への見返りは一切期待することがないという心性によって特徴付けられる人達を意味し，それはつまり，ボランティアとは奉仕的であり，自発的であり，無償の行為を行う人達である．

2）筆者が本団体と関わりを持った 2003 年 12 月の時点で「スペイン環境保護運動」に加盟している他の地域の団体は，ハランディージャの団体を含めて 6 団体であった．

3）あるボランティア行為者の話によれば，ここ数年，「高齢者福祉ボランティア」の意義，有効性を認識し始めた老人ホームは，資金提供や専従スタッフの手当てを賄うようになってきた．専従スタッフには元ボランティア行為者だった人もいれば，元老人ホームの職員だった人もいる．

参考文献

安立清史．1998.「福祉社会におけるボランティア活動と NPO―病院ボランティア，老人ホームボランティアの日米比較調査から」『福祉社会の家族と共同意識』梓出版社：135–156.

Allieres, Jaques. 1977. *Les Basques.* Paris: Presses Universitaires de France.

Armando, Miguel J.L. 1996. España y su realidad. *Revista de Socioligía de la Universidad de Valencia*: 4–12.

渥美公秀．2000.『災害ボランティア組織の社会

的基盤に関する日米比較研究』平成 9 年度〜平成 11 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告.

野々山真輝帆 . 1998.「価値観の変容」『スペインの社会』早稲田大学出版部：19–43.

Pilivian, J.A. and Charng, H.W. 1990. *Altruism: A review of recent theory and research.* Annual Review of Sociology 16: 27–65.

桜井正成 . 2003.「複数動機アプローチによるボランティア参加動機構造の分析―京都市域のボランティアを対照とした調査より―」『ノンプロフィット・レビュー』Vol. 2. No. 2: 111–122.

妹尾香織・高木修．2003.「援助行動経験が援助者自身に与える効果：地域で活動するボランティアに見られる援助効果」『社会心理学研究』18（2）: 106–118.

鈴木廣．1989.「ボランティア行為の福祉社会学」『広島法学』12（4）: 59–87.

生涯学習審議会答申．1992.『今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について』.

田尾雅夫．1997.「ボランタリー組織の経営管理」組織学会『組織科学』31 巻 2 号.

戸門一衛．1999.「第 10 章スペインの社会変化」『スペイン現代史－模索と挑戦の 120 年』大修館書店 : 349–362.

碓井真史．1992.「内発的動機づけに及ぼす自己有能感と自己決定感の効果」『社会心理学研究』7: 85–91.